

5C3 回目キングダムセミナー20250308

キングダムセミナー5C3 回目前半 20250308

それでは、2025年3月のキングダムセミナーを進めていきましょう。

信仰の歌を歌っていきましょう。ここで私達が、セミナーの前に歌っている賛美は、神への賛美は、賛美なんですけれど、これはセミナーの歌というか、我々の信仰を整えて、セミナーに入っていくための準備になります。ですから、この歌っているメロディとかリズムとかじゃあなくて、歌詞の意味をよーく、噛みしめながら、準備してしていきましょう。

賛美

はい、今日は、第5クルの3回目になります。0:16:53:84

セミナー本に入る前に、こういうところを消化していたら、「セミナー本がもっと、深くなる」という思いで、始めています。創世記1章から、2章、3章と、聖書の最初の最初ですよ。「そんなところは、もう知っていますよ。」と、大概の人は思います。

クリスチャンでなくても、この創世記の初めというのは、この世のいわば良識、常識、そんなレベルで「ああいう話ね」って、物語は知られているわけです。けれども、「じゃあ、じっくり味わったことがありますか?」と言われると、案外、そうではない。結構、荒く、そしておおまかに知っているということが多いと思います。

そこで、是非ここで改めて、「できるだけ消化しておきましょうね」ということです。なぜならば、『創世記』のこの初めというのは、神様が語り始められた最初ですよ。例えば、私たちが洋服を着る時に、一番上のボタンを掛け間違えたら、あとあと全部違ってきますよね。それは、もったいないことです。最初のボタンから、キッチリはめ、見ていくことは、とっても大事です。

そういうことで、第一回目に1章、第二回目に2章と、やってきましたが、皆さんの心の中に残っていますでしょうか? いつも私、言いますけれど、どうぞ何回も聞いたら、消化が深くなりますから。私もそうでしたから。もう、若い時からそうですけれど、一回聞いたってね、心をノックする程度よ。コンコンってね。「はあはあ、そうですね」って、慣れる初めはね。でもね、2回、3回と、それに馴染んで同じようにそれを食べていくと、だんだんと慣れて深くなっていく。ですから、どうぞ、一つの『知識』で「分かりました」といったり、『理論』で「ああ、そういうことか、分かりました」というのは、知性のレベルです。頭で分かっている、自分の『存在』で分かっているかということと、また、ちょっと違ってきますからね。

ですから、皆さん、「神様を信じます」「イエス様を信じています」って、みんな言うじゃあ無いですか。「あなた、信じますか?信じませんか?」っていうその『信じる』って、どう信じているかということが、問題なんです。我々は、信じるか信じないかというよりももっと深く、信じる、信じないを問われなくとも、それは、もう当たり前。我々は、もう当たり前のことを信じる?信じない?と言わないでしょ。当たり前なんだから。だから、そのレベルに入ることが、第一歩なのです。出発点なんです。そのために、まず頭で聞かなければいけないから・・・、進めていきましょう。では、今日は2章の最後から3章あたりにいくんですけど、初めにそこにより密着して入るために、ちょっと振り返って、進めて行きますね。20:35

5C3 回目キングダムセミナー20250308

さあ、[初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく何も無かった。闇が大水の上にあり、神の霊が水の上を動いていた]と書いてあると言うことは、これを認知する人もいなかったということ。人もいないのに神様はこう語りはじめたんでしょうか？これって、神様の独り言ではないです。

つまり、神様が語るからには、聞いている人が前にいるわけよ。じゃあ、それってどういうことですか？遠い、遠い昔の出来事を神様は掘り起こすように、人間に諭すように、教えられたのではないのかと。勿論、そういうふうに読んで、そういうふうに捉えることも OK です。23:49:91

けれども、聖書全体から私達がずっと読んできた『新約聖書』の中を見ても、神様とイエス様はこの時、共におられ、そして、天地の創られる前から、基が置かれる前からあなた方を覚えておられる・・・これって、どういうことですか？この位置。

つまりね、私達がこの 21 世紀に、始めてこの『創世記』のところを読み始めるでしょ。読み始めたら、そのあなたに、神様は語り始められるんです。でも、語られている内容は、まだ世界が創られる前なんです。世界が創られる前に、神様は、今、目の前に聞いているあなたに語り始められるんです。24:40:40

そうすると、この一日目、二日目、三日目と、順番に私達は、創られている、こういったものを見ているわけです。一緒にこれをね。理科の教科書みたいに、「ああ、一日目、こうなのね。あ、次はこうなのね。ああ、宇宙はこうなっているのね」というふうに、それを眺める物体として、これを読み、聞くと、それはそれだけのものです。

でも、聖書の奥義というのは、そうじゃあないんです。これを聞いているあなたの心の中に神様が創造しようとしている。『我々の内側』に天地創造が始まるぞという、この偉大さなんです。 26:24

それに、聖書というのは、誰かが、机の上でペンを取って紙に一生懸命に書いたんじゃないからね。そんなのずっと後だからね。神様は、語りはじめられたそれは、言葉で語られ、聞く方は、耳で聞くわけです。そこには、流れるような神の言葉の羅列があるわけです。聖書はね、読むものではありません。聖書は、耳で聞くものです。体で感じ取るものです。何回も言ってきましたから、どうでしょうか。27:10:56

ヘブライ語で元々、語られ、受け継がれていったものだからね、どこにでも、聖書という本があった訳でないからね。口で語って、耳で聞いて、また口で語ってという、そういう人間の生きた作業なんです。そこに神様が、業を、真理を、流し込まれたということなんです。だから、原文は、歌で伝えられました。この歌も紹介しましたよね。メロディーつきで。 0:28:00:58

ですから、[地は形がなく何も無かった。闇が大いなる水の上にあった]この地が形なく、混沌としていて、茫漠としていて、何が何だか分かんないという状態。神様と共に我々の内に、それを始められた。その初めがこれですよ。[地は虚しく形なく、何もなかった。闇があった]と。これを我々人間は、神と共に聞く時に、『自分の中に』始められたと、この言葉を納得してしまうんです。人は・・・、そうでしょ。自分の中の闇、形がなく、混沌している自分。でも、その中に、それだけじゃあない。[神の霊は水の上を動いていた]んです。我々の内に闇があり、混沌としているけれど、その底辺に水があり、神の霊が動いていた。そして、[神が、「光あれ」と言われる。] 29:34

ここ、何回も言っていますが、神の霊が水の上を『動く』といったこの言葉、水の上を『飛び回っていた』とか訳される。その元々の意味は、『飛びまわる、羽ばたいている』という意味があります。親鳥が子供
の雛鳥の上に覆いかぶさって、パタパタパターと羽ばたいて、「さあ、今から飛び立てよ」と言わんばかりの
神の霊の動きなんです。その時、「光があれ」と言われ、光ができたんです。『闇と混沌』があるということ

5C3 回目キングダムセミナー20250308

と、神の霊が羽ばたき、『光』ができた。それで、光と闇とを区別された。このように、一日、一日が深い意味を持って、我々の内に創造されてきたんだということなんです。 31：26

聖書はね、我々は聖書を客観的に読もうとしますよね。もちろん、客観的でなければならないんですけど、その認識の仕方が、神様のレベルと今の近代社会の人間のレベルと違うんです。

この前言いましたように、聖書というものを読むにあたって、『神の世界の根源的な言葉』というのがあると云いましたよね。それは、単純な言葉ですよ。それはね、『神様と私』『私とあなた』という言葉です。『我と汝』と言われるやつ。

ところが、もう一つあって、『私とそれ』。『それ』というのは物ですから、私とこのスマホは『それ』ですよ。けど、その『それ』には人格がない。物体ですから。客観的に見て検査して確かめることができるんです。誰でもが。でも、『私とあなた』と言う場合には、『あなた』というのは人格があり、自分と相対して応答し合える関係なんです。

聖書は、この『私とあなた』というこの純粋な関係の上に成り立っているんです。ですから、私達が、『私とそれ』という感覚で聖書を読むと、その奥義に行き着きません。いつまで経っても、それは、単なる『知的信仰』です。

神様は、私たちに神ご自身、『私とあなた』という私達一人一人に向かって、語りかけ、存在しておられます。存在しておられるんです。私達に『私とあなた』の関係で。それをね、私達はいつしか神様というお方を『それ』として認知しようとするのです。そうすると、そこで止まってしまう。知識は必要ですよ。聖書を『それ』という知識は必要でしょうよ。けど、それで止まったら、そこまでです。この聖書を書かれた、呼びかけられたお方にあなたという、『私とあなた』という出会いで、向き合っていくことなんです。そのことの大切さを、1章、2章、3章で、もろに見る事ができるのです。

ですから、ここのボタンをかけ違えたら、後々、ずーっとイエス様の時まで違ってきます。そして、聖霊との関係も違ってきます。もう、これまで何回も聞いてこられた皆さんだから、こういう端的な言葉で今言っていますけれど、分かっていたらと幸いです。

35：52:79

はい、そして重要なのは、1日、2日、3日、4日、5日と過ぎて、第6日目に来た時に、1章26節、[そして神は、われわれに似るように、われわれのかたちに人を造ろう。そして彼らに海の魚、空の鳥、家畜、地を這うすべてのものを支配させよと仰せられた。] 27節[神は、このように人を御自身のかたちに創造された。神にかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。] また、28節[神は彼らを祝福し、このように神は彼らに仰せられた。「産めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地を這うすべての生き物を支配せよ。」] 37：08:02

ここで人が創られるのです。だから1節から神は、天地を造られる前から私たちをご存知で、その私たちにに向かって語ってくださっているその『語り』が、26節にきて、やっと人である『自分』が創られるところに我々は出会うわけです。人である自分たちは、「ああ、こうして造られたんだ」というのを見るわけです。驚きですね。38:00

ここで、キーワードが出てきます。26節に「人を造ろう」と言われた。それは、人に何をさせようとしているのか。「地を這うすべてのものを支配させよう」という言葉がくるんです。彼らが造られて「楽しく生きるのを見ていよう」と言われたのなら、「ああー」と思うけれど、「地を這うすべてのものを支配させよう」、

5C3 回目キングダムセミナー20250308

そのために「我々に似るように我々のかたちに人を造ろう」と言われたんだと。これは、キーワードです。じっくり、胸におさめていないといけない言葉になります。そしてまた繰り返し「神はこのように神は人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造した」という言葉が繰り返される。39:32

いっぱい、いろんな物語や小説を私達は読んできて、その深い本当に豊かな形容詞や飾り言葉の文章を読み慣れている私たちにとっては、この簡素な言葉は、心になかなかひっかかっていかない。残らないと思いますけど、聖書はね、簡素な、短い言葉で、大切な言葉を一語一語、語ります。このね、「我々に似るように」とか、「我々のかたちに」とか、「創造された」というこの言葉が、どれだけ意味深いものとして語られているかということを我々は知るようになるんです。41:10

28 節に「神は、彼らを祝福された。神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、血を這うすべての生き物を支配せよ」と。ほら、またここで、「支配せよ」とか、「従えよ」とかが、繰り返されるんですね。この『繰り返される言葉』と言うのは、単純に読んで、我々の聞いた人の心に残るように語りかけられています。41:59

そして2章に行きます。1 節「こうして、天と地とそのすべての万象が完成された」それで2 節「神は第七日に、完成を告げられた」すなわち、「第七日目に神がなさっていたすべてのわざを休まれた」んです。3 節「神は第七日目を祝福し、この日を聖であるとされた。それは、その日に、神がなさっていたすべての創造のわざを休まれたからである」と書いてある。

六日目に実質、全部終わっているんです。それで、六日目に終わって七日目に何も造ったわけでもないのです。でも、七日目に完成を告げたといわれるんです。「第七日目にすべてのわざを休んだ。」ということは、『休み』も創造の完結であって、第七日目は、それだと。

だから、第六日目に造られた人間の翌日は『休み』だったんです。いいですね。だから、「さあ、なんかやりましょう」と言って立ち上がったんじゃないんです。人間には休みが、しっかり第一歩として、『休み』があるんです。何度も言いますが、あなたが一生懸命働いてやったことの報いとして、休みがあるんじゃないんですよ。私達は、神の中に完全に休まなければ、第一歩が踏み出せないんです。初めは、『安息』なんです。その『安息』を味わいましょうと、そういうことです。44:10

それから、第2章の5 節以降、また違う天地創造の話が出てくるんだけど、違う話が別々に載っているのは無いということは、すでにお分かりのことです。第1章の人の創造のところをグッとズームアップして、取り上げたのが、第2章です。44:50

6 節「霧が地から立ち上り（水が地から湧き出て）、土地の全面を潤していた」と。主が地上に雨を降らせていなかったから、木がなかった。なぜならば、土地を耕す人もいなかったからだ、と、5 節に書いてある。つまり、耕す人、造られたアダムに焦点があるわけです。（7 節）「いのちの息を吹き込まれた。そして、生きたものになった。」45:53

こうやって、エデンを造り始めていったと書いてある。これは、あなたが神に語りかけられて、あなたの内側に展開されていくものです。読んでいくうちにきっちり、『私とそれ』という感じの中で読んでいく傾向

がどうしても我々にはある。でも ここに、あなたも参加している。あなた自身が左右しているということ
す。46：53

そして、9節に「いのちの木と善悪の知識の木とを生えさせた。」と出てくる。そしてエデンから全地に川が流れて、水の源となる。」（10節）エデンというその領域から全世界へ、文明が流れ出ていくんだというかたちが書いてある。15節「神である主は、人を取り（連れて来て）、エデンの園に置き、そこを耕させ、守らせた。」と書いてある。この『耕す』ということと『守らせた』ということもキーワードです。

16節「園のどの木からでも食べて良い。」17節「しかし、善悪の知識の木からは、取って食べてはならない。それを（その木から取って）食べるとき、あなたは必ず死ぬ。」これもキーワードですね。

それからその後、18節「神である主は言われた。「人が一人であるのは良くない。わたしは人のために、ふさわしい助け手を造ろう。」」これは、前回、『ふさわしい助け手』って、なんなのかということを言いましたよね。

19節「神である主は、その土地の土で、あらゆる野の獣とあらゆる空の鳥を形造ったとき、それにどんな名前を彼がつけるかを見るために、人のところに連れて来られた。」まず、創ったのが動物、空の鳥・・・こうして、すべての家畜、空の鳥、すべての野の獣に名をつけたが人には、『ふさわしい助け手』が見つからなかった。すなわち、アダムが、『ふさわしい助け手』というのをこの動物の中から、選べるかどうか、アダム自身がそれを見つけて名をつけるかどうか、どんな名を付けるかどうか（神様は）見ていたとある。

ミルトスの対訳聖書をご覧になっておられる方もいらっしゃると思いますが、18節の「わたしは彼のために、彼にふさわしい助け手を造ろう」という、『彼に造ろう』と言ったところの単語に、すでに『彼女を造ろう』と、訳されていると思いますが、それについては、「じゃあ、ここで彼女を造ろうと言っているんだったら、『エバを造ろう』と言ったんじゃないか」という事になりませんか？」「じゃあ、この動物達ってなんでですか？浮かんてしまうじゃないですか、動物達の意味が・・・。」と思われるかもしれませんが、その『彼女を造ろう』という目的が、女性形になっているのは、（・・・詳しいことを言っちゃうけど、）写本上では、もの凄く疑問視されているところなのです。ですから、『彼女』とは、言っていないんじゃないかと、多く言われているところなんです。けれど、ミルトスの対訳聖書では、『彼女』といったという写本にしたがったわけなのです。はい、ちょっと突っ込んだことを言いました。51：48

でも、こうやって、すべてのものに名前をつけたが、人には『ふさわしい助け手』が見あたらなかった。そこで21節「神は、深い眠りをアダムに下されたので、彼は眠った。彼の肋骨の一つを取り、そのところを肉でふさがれた」こうして22節「神である主は、人から取った肋骨を一人の女に造り上げ、その女を人のところに連れて来られた」。すると、人は、やっと、そこで、23節「「これこそ」、「これは、これは、」と言って、『これこそ』という言葉**を強調して**、「「今や私の骨からの骨、肉からの肉」」と言って、「これこそ、私ではないか」とまで言っているぐらいの言葉を続ける。私の本質、私のエッセンスの中のエッセンス。私とガッツリ、セットで向き合うものというような勢いがある。

そして、そこで、24節「それゆえ男は、その父と母と離れ、妻と結び合い、二人は一体となるのである」『一つの肉となるのである』と言う表現。ということは、どうですか？みなさん。創世記の1章で、[人を

5C3 回目キングダムセミナー20250308

自身のかたちに創造された、神のかたちに創造し、男と女とに彼らを創造した]と書いてある。これが、第一の大きな神の言いたいことです。54:28

そして、そのところをズームアップして、二章では、男と女の創られ方が詳しく教えられている。この男と女が創られる、つまり、『ひとりの人』というのは、ここで勘違いするときがあるんですけど、[初めに神が人をご自身のかたちに創造された]という『人』というのは、『アダム』というんです。この『アダム』というのは、人なんです。男の名前ではありません。人なんです。その『アダム』という『人』を、男と女に造ったのです。

この『男と女』は、『ザはル ウネケヴァー』なんです。『イーシュ、イッシャー』では無いですよ。『ザはル ウネケヴァー』(1:27)は、いわゆるオスとメスに造ったというような感じです。1章27節のここで、さあ、オスとメスに造ったと訳したら、吹いちゃうでしょ。みんな。だから、品良く、男と女に造ったというふうに訳されているんだけど、要するに、「アダムという人は、オス性とメス性を持っていた」ということ、「それを二つに分けたんだよ。」と言っている。

どういうふうに分けたのかというと、2章に書いてある。眠らせて、その肋骨を取った。『肋骨』と書いてあるけれど、これは『脇』のことです。これも前に言いましたよね。『脇』という場所が非常に大切なんです。で、この『脇』を造り上げて、この女を人のところに連れて行った。で、人が感激して、「それを『女』と名付けよう」、「『イッシャー』と名付けよう」と言って、名前をつけたんです。これで、神様が、19節に「どんな名前を彼が付けるかを見るため」というその神様の目的が完了したことになる。アダムが「『イッシャー』と名付けよう」と言ったことで・・・そして、二つに分けておいて、22節に、「また、二人は一体となる。」と書いてあるんです。58:13

男は、女を見ている。このように、告白して名前を呼んで付けたけど、そしたら、一章の27節に「人を男と女に造った。」男と女は、ひとりのアダムの分身であり、分けられたそれぞれであり、いわゆる本当に、一対一の対等な存在ですよ。そこで、この2章で、『女がわけて創られる』という時になって、どうも男から女が造られたというふうに解釈されてしまう。しかも、男が女を見て告白しているけれど、造られた、連れて来られた女から男を見てどうだったんだよと、それ、書いてないよね。笑。そういうふうに、良く突っ込まれるんです。59:47

どうしても、「男中心主義だねえ」と、現代的には批判される所なんです。みなさんがそうだとはいませんが、「女は、女で、男を見て言いたいことがあったでしょう。「これは、互いに言わないといけないんじゃないの?」というふうに言いたいという、・・・けどね、これが聖書の書き方というか、一つの表現の仕方であることを知っておいて下さい。

2章24節に「それゆえ、男はその父母を離れ、」と書いてある。ここでも、男だけが書いてある。この表現というのは、アダムに父と母がいたわけじゃあない。なのに、ここで『父と母』と表現するということは、これはもう、『人間アダムの普遍的真理』を、その観点でいっていると、捉えないといけないということになります。1:01:10.8

5C3 回目キングダムセミナー20250308

つまり、女の発言は書いてないけれど、男の発言、つまり、アダムの発言、アダムから女が取られたその残ったものの、『残った方のアダムの発言としてとる』ということが、『男にも女にも、人、全部に言える【普遍的なこと】なんだよ』と、語っているということになるのです。いちいちね、じゃあ、平等だから「女はこう言った、男はこう言った」と、そう書くのが、現代的なドラマの脚本家じゃないですか。でも、聖書はそんな時代じゃあないんです。1:02:07

それでね、いっぺん、男と女に造っというて、一人のアダムから、そしてまた、一体になるんですよ。これってどうですか。私たちは、それぞれ男か女ではないですか。で、男ならば女と、女ならば男と一体になっている。二つに分けた後に、また一つとして、一人のアダムになっていくんです。この一であり二つであるという、神が一であり、三つであるというそこに、我々という奥義があるんですよ。

だから、我々もね、自分は、男か女か、どっちかですよ。だけど、肉体は、もう、男か女かであるんだけど、我々は、それぞれ男は男として成熟して、女性性を、神の女性性というものを身につけ伴っていき、アダムになっていくんです。女も、体としては、単独の女だけれども、そこに女性性も男性性も豊かにたわわに備わって来ている。私たちは、単なる女だけれど、アダムになっていくんです。そこに深〜い神が人間を造る奥義があるんです。

だんだん、わかってくると思いますが、私たちは、男か女か、なんだけれど、元々神が造られたアダムになっていく。中性になると言ってるんじゃあ、決して無いですよ。女は女のままだけれど、女性性が豊かに、豊かになる時に、男性性も備わって、分かってくる。良いですか、そういう人を神は喜び用います。そして、豊かに霊の子孫を増やしていく。1:05:01

そしたら、男と女の結婚というものがなくなるんですか。いや、そんなことは言っていない。それは、相変わらず有ります。けれど、霊的な成熟というもののの中では、我々の男性性と女性性が豊かに実ってくるんです。で、ある時、ある場面で、必要な時に、男性に女性性が豊かに現れることでしょう。そして、必要な時にひとりの女性の中から、深〜い男性性が滲み出てくるんです。1:06:07

前にも言ったか分かりませんが、私、子供のPTAの働きをしている時に、お父さん達の意識と気持ちが大切だと言って、私が“親父の会”というのを作ったんです。今でもある所はあるんでしょう。昔ね、流行ったちゃあ、流行ったんです。でね、親父達の会合で、ワイワイやっている時に、お母さんが一人来られまして、「すみません。入って良いですか」と言って、「どうぞどうぞ」と言って参加されたんです。そのお母さんがおっしゃるには「私は、シングルマザーです。私の子にはお父さんがおりません。」と言われるんです。「そうですか」「こちらは、お父さんの会ですけど、私のようなシングルマザーで、お父さんがいない家庭をどう思われますか」と言われて、みんな真顔になっちゃったんです。それで、私、言ったんです。「そうですか、どんなご事情か存じませんが、心配なさないでいいですよ。お父さんがいないんだったら、あなたの内にお父さんの存在とお父さんの子供に対する愛情が、出てきますよ。そういうふうには人は造られていますよ。心配ないですよ」と。「お母さんがいれば、そのお母さんの中にお父さんを補う存在力が子供を包みますよ」って言ったら、そしたらそのお母さんが、涙流して帰っていかれたんです。単純に言えばそういうことです。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

我々の霊的なクリスチャンワークの中でも、父性的なミニストリーが必要です。でも、教会の中では女性が多いじゃあないですか、ね。でもそんな中に、女性達の中に、父性的なミニストリーが湧き出してくるんです。男性達の中に、女性的なものが理解され、わかってくるんです。はい。1:09:01

クリスチャン達の男性でも女性でもね、自分のパートナーが、クリスチャンでないということは、多いじゃないですか。でも、どうしても自分と同じ霊性を持って動いてくれないパートナーに対して、がっかりしてしまったり、引け目を感じたり、不満に思ったりしてしまう。でも、神様は、だからと言ってあなたのパートナーに、「もっと言いなさい」「もっとこうしてと言いなさい」「ああしなさいと言いなさい」と、・・・それももちろん、あると言えばあるだろうけれど、そのパートナーがそうであっても、その過程の中に、女性性、父性と母性が必要な場合、その父性を補う分の父性を女性の中から、豊かに出すことができるんだよと、父性が強くて母性が弱かったとしても、父性の中から母性をカバーするだけの母性が、注ぎ出ていくんだよって。それをね、相手が足らないからって、相手に詰め寄って、批判し、嘆き、不平に思うという、そっちの方が、ダメージが大きいのではないのでしょうか。1:10:46:07

神は、豊かに、そこに注ぎ込むことができるんだよと。補って、回復することができるんだよと。そのクリスチャンの中から出てくるカバーリングの霊が、まだ目覚めていないパートナーを慰め、包み、築かせていくんだよと。これがしっかり分かっているクリスチャン夫婦よりも片方がクリスチャンでない夫婦の方が、もっと豊かに生き生きと、動いて行きますよ。なんの引け目を感じる事もない。我々はね、アダムになっていくんです。だから、アダムとアダムですよ。笑。ですね。ハレルヤ！そうでしょ。

そして・・・、24、25節は先月言ってないので、ここから新しくなりますが、最後25節、大切です。[そのとき、人とその妻はふたりとも裸であったが、恥ずかしいとは思わなかった。]これ、サラッと書いてあるんですね。で、裸であった云々が、三章でまた、テーマになっていくから、ここでその次の話に続くように書いてあると言うことは、確かなことです。

でも皆さんね、ここをどう読んできましたか？彼らふたりは、『裸であった』、これって、もの凄い意味深な1節だと思いませんか。・・・この裸って、どう言う意味だと思いますか？

参加者「信仰を持っていない人が裸で、信仰を持っていないことを恥ずかしいとは思わなかったのでは？」

先生「ああ、まだウブな状態のこと？なるほど。」「この『裸』ってどういう意味なんでしょうか？今言ってくださった他に何か？私はこう聞いてきたとか、ありますか？」1:14:32:53

これが、本当に、探求すべき一節なんですけれど、3章で起こってくる出来事は、勿論、控えてそこにあるんだけど、この『裸』と言うのは、あのね、原点のヘブライ語というのは、知っている人は知っていると思いますが、この言葉は、意味の広い、幅広い言葉なんです。「これがこれ？」っていうくらい、幅の広い言語なんです。

聖書で訳すときに、どれを使うかっていうのが非常に大切な考えどころなんです。で、これね、この『裸』っていうのは、そんなに数多く使われているわけではないんです。要するにね、連想すれば、「はあ、はあ、」と思うかもわかんないけれど、一つは『無力』なんの力もない無力な状態、今、信仰もない状態と参加者の方が言われましたけれど・・・ [彼らふたりは無力であって、]・・・「えー、その無力は、どんな無力

5C3 回目キングダムセミナー20250308

だろうか」って思っちゃうんだけど、・・・ということはね、『二人に分けられた彼らは、まだ十分に備わっていないかった。足りない部分があった。まだ欠けがあった。いわゆる完成状態、成熟した状態ではなかった。』と、見ることが出来る。

私達は、神様に造られたアダムとエバ、男と女、という時に、もう完成して立派な人として、出来上がった人として、造ってたんだというふうに錯覚していませんか。けどね、聖書の書き方というのは、そんなに「おおー、出来上がった！パチパチ」という感じじゃあないと言うことです。欠けがいっぱいあり、足らざるがある。それでも、彼らは、「互いに恥ずかしいと思わなかった」というのです。1:17:47

それで今度ね、一番最後の言葉、[恥ずかしいとは思わない]というこの言葉が、問題なんです。この言葉、皆さん、ヘブライ語を調べることができる方はどうぞ、調べてください。これね、ヘブライ語の語根は『ポーシュ』と言って、三文字なんだけど、たった三文字の『ポーシュ』という言葉が、「イトゥボシャーシュー」と言って、沢山の文字が並んでいる言葉に変形するという、びっくりなんだけど、これは、話の一番最後だから、耳に印象に残るように、こういう言葉に変えてるけど、でもね、この『ポーシュ』という3つの文字はね、『恥ずかしい』という言葉と同時に（なんでこの言葉が一緒の意味になるの？と言うぐらいなんだけど）、『水源が枯れる』と言う意味があるんです。そう言う言葉が、旧約聖書の予言書、ホセア書にあるんです。1:19:25:32

この『ポーシュ』は、恥ずかしいんでしょ。よく思ってみると、『水源が枯れる』と言うことは、恥ずかしいことなんです。1章、2章読んできた人は、ピーンと、きませんか？水源が枯れる、あるいは、『干上がる』、干上がっちゃうんです。『干上がること』は恥ずかしいことなんです。エデンの園には、泉の源があり、それが四つの水源として、流れ出ているでしょ。エデンの園って、カラカラの砂が飛ぶような、そんな、からっからの土地ではなかったみたい。神は言われている。「そこには湿って、豊かに水があったんです。これが枯れてしまう状態は、『恥ずかしい』ちゃあ、そうだよなあ。意味深なことになるんです。ということは、『我々に、欠けがある、まだ未熟である、欠点もある、でもそれは、干上がっているということではない』と言うことです。

どうしても、今、我々は、「何々が私はまだできない。」「こうしていない。」「まだ欠点がある。」「弱いところがある。」「それは、恥ずかしいことだ。」・・・仰せになったとおり、「信仰も欠けている」「信仰を使うと言ってもまだできない」「どうしたらいいの」と、みんな思う。でもそれは、恥ずかしい事ではない。水源が干上がっていることではない。「あなたには、水源があるんだ」と。「その状態から、一歩、一歩、成熟し円熟していけるんだよ」と。「胸を張りなさい。」神様の前に立っているものとして、胸を張りなさい」という、この状態であったんだ！二人は・・・というところで、2章が終わります。

どうですか、1章と2章、人間が造られたという、メインテーマの『あなた』というもののの中に『あなたが造られていく』のをもう一度見せられた。そして、その締めが、25節です。さあ、ちょっと休憩しましょう。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

キングダムセミナー5c3 回目後半 20250308

はい、それでは後半を始めます。

参加者「その前にちょっと質問なんですけど・・・」

先生「質問ですね。どうぞ。」

参加者「さっきの2章24節の「・・・男は父母を離れて・・・」のところなんですけど、この時点で男には父も母もいないんですよね。父も母もいないのになんでこの24節に急に出てきているのか、この事を先ほど、この件については「普遍的な観点で捉えないといけない」と言われたんですが、それをどう捉えてよいのかがちょっと分かりずらいんですけど・・・」

先生「うん、アダムの父と母がいたと書かれていないのに、ここで急に「父と母を離れ」と出てくるのはなぜかと・・・そうですね。もう、このこと自体が、この時のアダムだけに集中して、24節が書かれているわけではないと言うことを示唆しています。つまり、後の全ての人類に対して（当てはまること）、普遍的な意味があると言うことです。はい、そう言うことです。」

参加者「ヘブル語でもこう書かれているんですか？」

先生「はい、これは、ここの書かれかたは、一緒です。」

参加者「それと、もう一つ質問なんですけど、2章25節の「二人はとも裸であったが、恥ずかしがりではなかった」というところなんですけど、この『裸』と言うのは、無力な状態とか、足りない部分がある、欠けがあるというのか、神様は完成されていないというのか、そういう意味合いがあるということでしょうか？ 神様が人を造った時に、ご自身のかたちに似せて創造されたのであれば、まあ、そのまま神と同等ではないにしても、人もそういうご性質があるはずですよ。人は、男と女に分けられたそれなんですけど、自分達は、そこまで無力であるとか、足りない部分があるとか、欠けがあるという、完成されていないという考え方というのか、感覚というものは、ないのではないのでしょうか？ ここは、私達クリスチャンと重ね合わせて説明しているということなんですか？少なくとも自分達の中には、そういう認識はないのではないのでしょうか？」

先生「はい、そうですね。裸であったことを彼らは、気づいていない。ここ、25節の「恥ずかしいと思わなかった」と言っているのは、『語り』（である神）が言っているのであって、アダムではないですからね。アダムの認識ではない。全く、気に留めなかったと・・・」

参加者「だから、アダム達にとって、裸の姿が自然であったということですよ。」

先生「そう、そうです。でも彼らがそのまま、恥ずかしいと思わなかった状態で、次3章で、蛇の語りかけを受けるわけですよ。その時の彼らの対応が、どうだったかと。彼らは、神の似姿と全く同じ神と等しくあるかのように、蛇にふるまったかどうか。アダムとエバは、互いにそうであったか、と言うところに展開していってしまうわけですね。・・・というところで、良いですか？」

3章、大事なところに進んでいきます。耳と心と魂を開いて読んでいきましょう。8:00.34

3章1節「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣うちで、蛇が一番狡猾であった」と。これ、聖書原文では、一番初めに何が出てくるか。初めて出てくる単語に、そこに強調点があると言われています。訳してしまうとこうなりますが、ここね、初めは、「蛇は」なんです。一番初めは、「蛇は、最も狡猾だった。神が創られた生き物の中で」という、こういう言い方なんです。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

ここで、3章の1節から、場面変わって、ガーンと、強調的になって、いわゆる劇場だったら、BGMが、ガガガガ、ガーンと音が鳴り響いて、そこでね、「蛇は一、」とこうくるわけですよ。笑。どうよ、コレ。その臨場感を、どうぞ味わって下さい。9:20.35

野の生き物の中で蛇が最も狡猾だったということは、なんですか？蛇ほどではないけれど、狡猾な生き物がいっぱいいたってことですよね。これを覚えないといけないよ。蛇だけが怖い？いえいえ、蛇ほどではないけれどよ、脅かすわけじゃあないけれど、ちょこっと狡猾なものがウジョウジョいます。笑笑。ごめんね、脅かしちゃってね。でも負けないからね。

そして、2節「蛇は女に言った」このね、『誰が誰に言ったか』と言うのが、これが大切なんです。蛇が出てきて、『女に言った』と、人々に言ったんじゃない。夫婦に言ったんじゃない。『女に言った』神様が『私とあなた』という関係を重要視されるんです。その神様の在り方を蛇はよく知っている。

蛇は女の前に行って、語りかけたんです。なんと言ったか。「あなたがたは、園のどんな木からでも食べてはならないと神は本当に言われたのですか」と・・・みなさん、この質問というのは、どう思いますか？考えた事がありますか？次の言葉の方が注目されるけれどさ。蛇のこの質問というのは、「何？トンチンカンな事を言ってるの？」「なんでそんな質問をするの？」と思わないといけない。

「園のどんな木からでも食べてはならないと神様は言ったのか？」そうじゃあないんですよ。神が言ったのは『どんな木からでも食べて良い』と言われたんですよ。2章の16節で。それをね、ただ食べて良いといったんじゃないんだよ。そういう言い方じゃあないんだよ。思いのまま、すなわち、原文のニュアンスで言えば、どんどん食べろと。園のどの木からでも、どんどん食べろよと言ったんです。「しかし、この二つの木の実、いのちの木の実と善悪の知識の木の実があって、善悪の知識の木の実から食べるなど、それを食べるとあなたがたは『死ぬ』と仰せられた」

13:26.4

このところの読み、その表現のまま受け取って良いんですよ。間違いじゃあ無いですよ。ただ、ここをヘブライ語の聖書を、勿論、日本語の聖書、どの訳にも現れているけど、こう言う読み方、意図を示唆しているのではないかと、前に言いましたよね。

すなわち、2章の9節に「食べるに良い物をもたらしあらゆる、全ての木を生え出させた」のだけれど、「園の中央に」と言う言葉が、不思議とここに入ってきている。神の園の『中央』というのは、何を意味しているのかということに思いをはせていくと、出エジプトの荒野の中で進んで行く12部族の中央にある・・・、そこに『中央』という言葉が強調されていた、その同じ『中央』です。

そこには、幕屋があり神殿があり、至聖所がある。要するに、神の臨在、神のいのちの中心がそこにあるのです。そこにある善悪の知識の木の実といのちの木の実とが、それに重ね合わされているのではないかと。そうすると、『いのちの木の実をとって食べる』とは、何を意味するのか。

元来、善悪の知識の木の実、いのちの木の実とは・・・、いのちの木の実は『神のいのち』というので間違いないが、『善悪の知識の木からはとって食べるな』というのは、事の善悪の究極は、神様でしかない。神の臨在のその中の、その中央に神御自身の権威と臨在が宿っていて、神が事の善悪を見極める根源でしょ。その

5C3 回目キングダムセミナー20250308

神の権限を神の中央にあるその臨在のただ中、真ん中にある実をとって食べるということは、『神の究極の権威と尊厳を自分のものとする』という事を意味すると。

すなわち、善悪の知識の木の実だけがそこにあって、そこからポチッと取って食べるなどということは『善悪の知識を得る』という意味で、『善悪の知識の木として』、園のどの木からでも食べてはならないと。つまり、『あなたがたは、見るに良く食べるに良い、どの木からでも思いのまま食べて良い』と言われた。しかし、善悪の知識の木【として】は、そのすべての木からとって食べるな』という、そういう意味ではないかと、深い読みがあります。それを、そう取りたくないという人は、それで良いんですよ。それを紹介しました。

すべての木を『善悪の知識の木の实【として】食べるな』と、・・・だからですよ、3章の蛇が出てきた所の初めの問いかけが「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならないと神は本当に言われたのか」と蛇は問うている。そうすると、蛇の問いかけの意味がわかりますよね。

それで、女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べても良いのです」そうです、木の実を食べてよいのです。「しかし、園の中央にある木の実について、神は『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもならない。あなたがたが死ぬといけなから』と仰せになりました」触れてもいけないというのは余計だけれど、それと「必ず死ぬ」と言われたのが、『死ぬといけなから』と言っている。この辺が、微妙にズレがある。4節「そこで、蛇は女に言った「あなたがたは、決して死にません。」5節「あなたがたがそれを食べる時、あなたがたの目が開けあなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」」ここ、どうですか？微妙なところをついていますよね。蛇は狡猾ですよ。20：30

ここでね、みなさん、この5節の言葉、さっき言いましたように、これも原文で見ている方は、すぐお分かりだと思いますけれど、5節の「あなたがたがそれを食べる時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです」・・・あなたがたが、神のようになるんだよと言うこの言葉、原文では、みなさん、言葉の初めに出てくる言葉が、言いたい重要な言葉だと、さっき言いましたよね。なんて書いてありますか？原文聖書を見ている方、初めは（・・・日本語で訳されている一番最後の言葉が、一番最初にきているんです。これ、最初に持ってこなくてもいいわけじゃあないですか。日本語のように後でもいいんですよ。意味全体を思えばさ。けど、初めに何と書いてあるかということ・・・）、『神は、知っているんですよ』と、こうですよ。「神は知っているんですよ。それを食べた時あなたの目が開き、神のようになることを」と。ここ、何が強調点ですか？神様のやり方、『神がどうなのか』を言っているわけですよ。23：02

ここで、『神』、『神』というけれど、この3章に入るとですよ、3章の1節を見てください。『神である主』と書いてあるよね。『アドナイ エロヒム』という言葉。ここで語りは「『神である主』が造られた野の獣のうちで」という言い方をしているんだけど、その中の蛇の言葉は「あなたがたは、園のどんな木から食べてはならないと『神』は本当に言われたのですか」という蛇の言葉には、『主なる』という言葉が、入っていない。蛇は、『神』とだけ言っている。重要な変化です。『主なる神』というのはね、私と神は、私は神を自分の主人とする。『主である』という関係用語なんです。関係性を現す言葉なんです。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

『主』というのは・・・、『神である主』、私と主である方、その関係性を表す『主は』『神は』という言い方を今までずっと、2章でずっと言ってきたのに、蛇はここで、それを敢えて変えてきている。『主なる』という言葉は削除して、『神は言われたのか』という言い方をするの。それに次いで、3節で女は、しかし園の中央にある木の実について、『主なる神は』と言っていない。『神は』と言っている。蛇と女とが向かい合った中で、蛇のあなたはエバであり、エバのあなたは蛇であった。そこで、蛇は女に言った。ここでまた会話が続く。

そして、5節に『神は知っているんだよ』ということになる。この会話、どうですか。神とアダムは『あなたと私』。そして、つい先程まで、男と女は『あなたと私』だったんです。ところが、蛇が女と向き合って語りかける会話の中で、だんだんと蛇と女の会話の中で、『この主なる神』の存在は、ただの『神』になり、そして、もっと言えば、蛇と女の間で神様は『彼』なんです。『神様ってね、知ってんだよ。これを食べたならあなたが賢くなって、神のようになることを。』・・・分かる？『わたしとあなた』という関係性の中で『彼』という第三者を指す時に、もう、それは単なる『あなた』ではない。【『あなた』のように聞こえるけど、だんだんと『それ』に近くなっていく。】27:59.10

「神様と向き合うことない。わたしが真理を教えてあげよう。」と、そういう風に『主なる神』をただの『神』として『彼』として語らい合う中で、6節[そこで女が見ると、その木はまことに食べるに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった]と、書いてある。だんだんそう見えてくる。それで、当然、手を伸ばすよね。[それで女はその実を取って食べた。いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた]

この時、夫はどこにいたんですか。いろんな描き方があるよね。このエデンの園の中世の洋画を見ると、蛇と女が木を間にして、挟んで対面しているんです。でも夫はどこに居るんですか。食べた、与えたところはエバと3人描かれているけれど、蛇と女だけの所には夫は描かれていない。でもそれは、絵を描いた人の解釈でしょ。こここのところをそう解釈したんです。演劇でも映画でもこんな場面があります。そうすると蛇と女と会話してるけれど、アダムはどっかに行っている。本当にいないように描いています。それもその人たちの解釈です。でもね、原文見るとね、ここに書かれている言葉はね、一緒にいるというニュアンスのある言葉がかかれてあるんです。そこに驚いちゃう。「そんな馬鹿な。一緒にいるんだったら、直接聞いているアダムが止めるわ。止めないわけじゃないの。だから、ここにはいなかったに違いない。」と言って描かない。

でも、聖書のニュアンスは、そのまま読むと、[女はその実を取って食べ、一緒にいた夫にも与えたので、夫も食べた]と、この通りなんです。じゃあ、蛇はアダムには言わなかったんだ。一緒にいてもエバだけに言ったんだ。あるいは、聞こえていてもアダムは何も言わなかったんだ。みなさんは、どう思いますか？この答えは、みなさんの夫との夫婦関係による。笑笑。ごめんね。それによって、「私の場合は、こうだよ」と言いたくなってしまう。笑。だから、その問いかけには答え難い。ですよ。笑。32:07.76

兎にも角にもいっしょにいた夫にも与えた。多くの男の人からすれば、奥さんが「はい、美味しいわよ。」と言って、隣にいてホイッと渡されると、「そうか」と言ってパクッと食べるよね。なんの疑いも持たずに、ね。笑。（参加者から）今、「主体性を持って欲しい」という指摘がありました。笑。ねえ、男はね、・・・でもね、よく考えて「俺は今はいらない」という、「ウチだったらそうだよ」という人も過去にいましたよ。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

凄いなあとと思いますけど・・・、でも、あっさり描いてあるこの言葉の中に何が含まれているか、[一緒に居た夫に与えたので夫も食べた。]ということです。

エバが食べているのを見て、神様が『きっと死ぬ』と言われたけれど、エバが食べたけど死ななかったのをよく見ていたから、「ほー、死なないじゃ。じゃあ、食べよ。」と、男はそう思ったという説もありまして・・・。 だけど、それはともかくとして、ここで、夫としての・・・、文字通りですよ、その食べる、食べないのことで、そこに現れていることで何が問われるかということ、夫は『食べたら死ぬ』と言われた神の言葉を知っていたにもかかわらず、[与えたので夫も食べた]と、なってしまうという。34:23

ここで女は、そばに夫がいたんだったら、夫に対して確認すればよいと。そうしたらね、夫は夫で知っていたことなんだから、女と蛇の間に分け入って、「おい、ちょっと待てよ」と言えば良いと。でも、『妻が言うままに夫も食べた』と、ここを、後ほど神様は指摘しているところですよ。このようにしてどうなったか。35:11

3章7節[二人の目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った]今まで裸であっても何とも思わなかったのにね。

神様と『あなたと私』で向かい合っていた、男も女もそう。だけど、蛇との向き合いによって、それが、『わたしとそれ』という関係が忍び込んでくる。36:10

そして、この時ですよ。腰のおおいを作っただけではなくて、8節[そよ風の吹く頃、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した] ここで語りは、『神である主』という言い方に戻している。『神である主の声を聞いた。』とある。37:02..84

9節[神である主は、人の呼びかけ、彼に仰せられた]・・・その後でも、神である主は、人に向き合おうとされたんです。[あなたは、どこにいるのか]・・・「どこにいるのか?」と言ったって、神様なんだから、どこにいるのかぐらい分かっておられるわけです。これ、どこにいるのかというのは、本当に、物理的な場所が分からないから尋ねている言葉ではないです。本当にどこにいるか分からなかったらね、これ、ヘブライ語で別の言葉があるのよ。だけど、ここに書かれてあるのは、物理的な意味じゃあないんです。所謂、なんですか、言葉変えて意識すれば、『あなたの心はどこにいったのか』と、そういう感じですよ。『あなたの心は、今迄わたしと向き合っていたではないか、それなのにあなたの心はどこにいったのか、どこに隠れようとするのか』

そうすると、10節[彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました」]・・・私たちがね、どんなに柔い状態、心がしっかりと、神の望むような円熟した状態でなかったとしても、それは、恥ずかしい恥ずかしくないなどという・・・何の劣等感をも持つべきではないんです。神と向き合っている領域の中では、全然問題ではないんです。ところが、蛇と向き合うことを覚え『わたしとそれ』という世界を知っていくにつれて、神との『わたしとあなた』との向き合いは、出来なくなっていく。そのとおり、木の間に隠れた。[「それでわたしは裸なので、恐れて隠れました」]となる。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

11 節「すると仰せになった。「あなたが裸であるのを、誰があなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか」」・・・『あなたが裸であるのをいったい誰が教えたのか。わたしは教えてないぞ』と。『わたしはあなたが裸であっても、何も気にしないぞ』と。そうなんですよ。そうおっしゃって下さっている。そうなんですよ。クリスチャンになったと言っても神様の前に、まるで裸であることを恐れるかのように、隠れて、隠れて恐れている人がいます。そんな必要はないんです。41：03

『何で食べたのか』と、それで12 節「人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです」」と。この言葉もみなさん、対訳聖書を見ている人はびっくりですよ。こういう言い方をしていますか？していませんよね。対訳聖書では、アダムは、とっさになんて言ったのか。『その女がー』という言葉が最初ですよ。こんな、順序立てて言っていないよ。あなたが私のそばに置かれた『この女が』・・・、まあ、意味は総じていっしょなんですけど、「その女が、私に取ってくれたから食べたんです」と書いてある。その女って誰ですか？「あなたが造って私のそばに置いた『この女』です！」この勢いですよ。はい。「ずるーい」と女の人は、もう、・・・まあ、事実だけだね。

13 節「そこで、神である主は、女に仰せられた。「あなたは、いったい何ということをしたのか」」主はね、今度は女に向き合った。[・・・女は答えた・・・]これ、女の言い出しは正直ですよ。このままなんです。原文通り。「蛇です！」と言っている。その通りだよ。[「蛇が私を惑わしたのです。それで私は食べたのです」]アダムにしても女にしても、どっちみち、人のせいにしているのだけれどね。ここで、「すいません。私は食べてしまいました」と両方が言っていたら、また変わっていたかも知れませんが、そうは言えない。必ず、私以外に悪い奴がいると。みなさん、これはね、私たちの人間の中にむくむくと潜んでいる肉です。43：47.20

その根源、それはね、「私は問題ない、でも悪いのはこの人なんです。」「あっちのせいで、私がこうなりました」「私が今苦しいのは、私のせいじゃあなく、この人のせいなんです」「あの人のせいなんです」という、論理です。蛇が喜ぶのは、この論理なんです。はい。つまり、いつも、『自分を被害者の立場に置きたい。』という。「私は、被害者なんです。加害者はあっちなんです。誘ったのはこっちなんです。この人たちのせいなんです。」でしょ。いつもね、「それで自分は可哀想な人なんです。自分はそのお陰で害をこうむり、苦しい目に遭っているのです。」という、『自分を被害者の立場に置き、自己憐憫に陥っていく』のです。45：07

これがね、聖書でいう根源的な肉、所謂、罪の根源です。「こんな目に遭っているから、こんな目に遭っているから、どうぞ神様、助けて下さい。」と、なる。でもね、聖書のメッセージは、神の構えは、最初から変わってないよ。ずっと、神様は、向き合おう、向き合おうとされているんです。でも、我々が被害者の立場で、「あの人を何とかしてください」「この人を何とかして下さい」「この環境を何とかして下さい」と言い続けている限りは、道は開けてはいきません。46：17.18

『自己憐憫と被害者意識』というものから、どうしたら離れられるか、それはね、「本当に、あの人この人、隣のあの人の、この環境が悪者なのか？」「あなたには、いつでも自在に、自由にできる見方・選択権が与えられているんだよ」と言いたい。「あなたは、この状況をどう見るんだ？」「あなたも突き詰めてゆけば、あなたの方も加害者の一人ではないのか。その中にうずもれているのではないのか。」・・・そのことが、だ

5C3 回目キングダムセミナー20250308

んだんと神様の成したことを追っていくうちに見えてくる。すなわち、新訳でいう『イエス・キリストの十字架と贖い』、それなんです。 47:50

あのイエス、神の子イエスを十字架に磔にしたのは、「あの人だ、こいつらだ、誰だ」と言っているうちは、我々に望みはない。でも、イエスを十字架につけたもの達のただ中に、自分もいるではないか。いや、『ただ中にいる自分』ではなくて、「『自分こそ』、イエスの十字架の上で、イエスの手や足に釘を打ったものではないのか」という、自分自身に向き合った、そこに自分を素で、眺められるようになったその時に、私は、『根源的な人間の罪から解放される』のです。 はい、そういうことでしょ。 49:02

14 節「神である主は、蛇に仰せられた。「お前がこんなことをしたので、お前は、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりものろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない」」15 節「私は、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。・・・彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく」」蛇に言われた宣言になります。これは、重要なことで、みなさんもよく覚えておられると思いますが、『最ものろわれる』という呪いを蛇に、神は宣言された。そして、おまえと女との間の関係性として、敵意をおく。その女が産む子孫の中の一人、彼が、おまえの頭を砕くだろう。おまえは、彼のかかとかみつくだろう。・・・これは、聖書の原文の『平行法』と言いましてね、彼はおまえの頭を踏み碎くというだけじゃあ、足りないんです。彼は、おまえの頭を踏み碎くけれども、おまえは彼のかかとかかとかに今度、噛みつくという、一つの何が何をやる、（一方も）何が何をやるというように、平行に並べる。聖書の得意な言い方なんです。これって。

それで、一方的にその女の子孫が頭を砕くだけではなくて、おまえも彼のかかとかに噛みつくだろう。致命傷じゃあないけれど、なんかやるだろうという、これってね、激しい闘争を表している。この平行法の強調はね。これが、『原初の福音』と言われるところでね、女の子孫が、この蛇の頭を砕いてくれるのだという、凄
いことを言っているわけです。 52:03

そして、向きを変えて、女に向いて、わたしは、あなたに身籠りの苦しみを大いに増すと・・・、16 節「あなたは苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋慕うが、彼は、あなたを支配することになる」」・・・女に言ったこれって、よく言われているのは、『出産の痛み』ということを目指していると、そう（受け）取ってききましたか？聖書ってね、普通の我々の人間の生活の中の、当たり前な、具体的な姿を取って、描いて、深い霊的なことを表そうとするんです。

ですから、これはこのまま、「ああ、産みの苦しみのことを言っているんだな」と、「そうでしょうね」と、飲み込んでおけばいいけれど、これ、みなさん、「ああ、神様は、女にはこういう罰を与えたんだな」と、みなさんは言うけれど、本当に、これが、女に対する罰ですか？そのすぐ前に、蛇に対して、おまえの子孫と女の子孫という、『女が産む子の間に』という、ここに、出産、産み続けるということが書かれておりながら、今度女には、それから、続けてのように、こういう言葉が言われるというのは、どうなんですか？女は、苦しみを大いに増す。つまり、『女の子孫と言われるものを産むことに向かったの苦しみを大いに増す』とされているのではないかな。 54:29

5C3 回目キングダムセミナー20250308

しかも、今度は次、「あなたは夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配する」と書かれているここも、平行法なんです。「大事だよ」という感じのことを言っている。「あなたは、夫を恋い慕うが、彼はあなたを支配する」、あなたは夫を『恋い慕う』というところ、これも翻訳によりますけれど、もっと、忠実な雰囲気言えば、あなたはあなたの夫を『深く求める』、あなたは夫を『欲求する』、『深い欲求を向ける』と・・・。そして彼は、夫は、あなたを支配すると言ってるけど、この『支配』の意味ですよ。所謂、もう暴君の強烈な亭主関白になって、あなたを蹂躪（じゅうりん）し、奴隷のように扱うんだと、それが、女よ、お前に対する罰だぞ」と、いうふうに言っているのか？59：02.40

この「支配する、支配する」とよく言われている1章、2章のその言葉からすれば、いいですか？

あなたは、夫の存在を『求め、欲求を深くする』そして、彼はあなたを『治める』『あなたを覆い』『あなたを守る』という意味合いの支配なのでは無いのか。この『支配』という原文を探究していけば、両方にたどり着くからね。その中で、ここをどう解釈したかによって、どの訳語を選ぶかが、決まります。微妙なところなんです。だから、この14節15節16節は、「神様が女に語った罰だ！」と、言い切ることができますか？
むしろ、神様は、呪ったというのは蛇であって、女に、わたしはあなたを呪うとは書いてない。57：45

マルチン・ルッターという人が、この解説に、「女はさぞ喜んだだろう」と、言っているんですよ。ここを読んで、彼はね。マルチン・ルッターは、ヘブライ語聖書をドイツ語に訳すために、ヘブル人のラビについて、一生懸命ヘブライ語を学んで・・・、相当、学んだと思うよ。聖書を訳すくらいだからね。学んで、学んで、そして、ここを書いて、後で解説に「女は喜んだと思うよ。」と、そう言う言葉を残しているんですよ。

ところで、ルッターと聞いて、みなさん、最近悪いイメージの人が非常に多いように思うんですけど、・・・そうじゃあないですか？ね。聞いたことがあるよね。マルチン・ルッターがユダヤ人を攻撃して、ユダヤ人をミソクそに言って、書き残しているモノがあるんだと。それをヒットラーの調査をする人が見つけて、それをヒットラーの自分の文章の中に引用して、配っていたと。なんて奴だと・・・。だけど、それね、ことの文脈を知らないで、そこだけ取って、ルッターを攻撃しているんだよ。うん、そこ、間違っちゃあいけない。

なんでも、反ユダヤ主義の根底はどこにあるかという、なんでも「あれ、あの人が、この人だ」と言って、見つけたいんだろうけど、ルッターほど、あの宗教改革の時に、「ユダヤ人こそ、このイエスの福音を知るべき人はいない」と言って、本当に、ユダヤ人伝道のために尽くした人はいなかったんだよ。

彼の前半生はそうなの。尽くして、尽くしてやったんだけど、ユダヤ人集会の方は、もう、見向きもしなかった。かえって、足蹴にされたんだと。で、それも、今のユダヤ人イメージじゃあないよ。あの中世のユダヤ人イメージの中で、彼は言ったんだよ。だから、ユダヤ人と言っても、そんなおとなしい人たちがばかりじゃあない、あの『タルムッド』という文章の中に、異邦人は犬だと、異邦人は相手にするに値しない。もう、異邦人は消すほうがいいのか、みそくそに書いてある。

それで、それを実行するユダヤの人たちもいたわけですよ。だから、ルッターという人は、物凄く気性の荒い人ですよ、あの人は。だからもう、カンカンに煮えくり返って、怒って、もう、バァーと、あの文章を書いたと言います。『ユダ人とユダヤ人の嘘について』という文章、私、アレを全部読みましたけれど、すごい書き方ですよ。「わあー、ルッターの性格がわかる、コワ〜」という感じで。

でも、そこに至ったそのことの中でルッターは、「じゃあ、ユダヤ人を潰せ、殺せ」と、「家を焼き払え」と、言葉まで書いてあるんだけど、本当に。だけど、それを本当に実行したということは全然ないわけ

5C3 回目キングダムセミナー20250308

ですよ。書くだけで。でも、それをナチが利用したということで、「マルチン・ルッターは、ナチを支持したんだ」と、近年、もう、そういう話で、バンバカ、バンバカ叩かれているんです。ねえ、だから、ルーテル教会は、ものすごく困って、今、ちゃんと声明を出していますよ。【マルチン・ルッターの『ユダヤ人とその嘘について』という文章について】というテーマで。そこまで探究していかないとね。ごめんね、ちょっとそれでしたが、まあ、ルッターが、「女は、大変喜んだ」と言っているんです。1:02:21.52

そして、3章17節後半、アダムにも仰せられた。[「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならないと 私が命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった」] アダムが呪われたとは、言っていない。あなたのやったことの故に、『土地』が呪われたと言っているんです。ここ、大事。それほど、『あなたの』という『アダムの在り方によって』、全地は変わるんだよと、いうことですよ。1:03:01.25

(3章17節) [・・・「あなたは、一生苦しんで食を得なければならない」] 3:18節 [「土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない」] 19節 [「あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたは、そこから取られたのだから。あなたはチリだから、チリに帰らなければならない」] という、この18節19節は、「えー、厳しいな」というふうに受け取られますけれど、このアダムに対しての言葉、・・・アダムに仰せられた『あなた』が、どうしたっていうのよ。[「食べてはならない」と言われたのに、妻の声に聞き従ったということが問題なのか。じゃあ、妻の言うことを、何も聞いたらいけないのかと、・・・そこへすぐに飛ぶのじゃあなくて、エバがね、女が、蛇に向き合ってこうなったように、その女に向き合い、食べてしまったということは、つまり、女も男もまず第一に神と向き合うべきだったんですよ。これらの中で、神様は、『あなたがたは、どこを向いているの?』『あなたの心はどっちに向いているの?』『誰に向き合っているの?』ということを問うておられる。1:04:48.81

だから、「あなたが妻の声に聞き従い、食べてはならない」と言う言葉には、「わたしが命じておいた木から食べた土地は、あなたのゆえに呪われたのだ」と言える。それならば、逆に、本来（の関係）、あなたが神に向き合い、妻も神に向き合い、生きてゆくなら、あなたが、その呪われてしまったと言う土地、いばらとあざみが生える土地も、それは、変わるわけですよ。あなたの労働は、苦痛ではなく、あなたの労働は栄光になる。本来そうなんですよ。だけど、そのままゆくと、あなたはチリだから、チリに帰るしかないよと。・・・そんなに（厳しく）、神様は叩き込んで、エバにも、アダムにも『罰、罰、罰、これでもか、お前らはこうなるんだ、お前らのせいだ』と、言っているのでしょうか。1:06:23

その次、20節に[さて、アダム（その人）は、その妻の名をエバと呼んだ] この簡単な単純な文の中に、(神から) 蛇と女とアダムについて聞いた言葉についてのアダムの感想がある。反応があります。そこでアダムがニコッと笑ったとか、渋い顔をしたとか、そんな余計なことは何も書いてないんです。[その妻の名をエバと呼んだ]と。それは、彼女が全ての生きているものの母であったからである]と。この蛇と女とアダムに対して言った神の言葉を聞いて、なんで20節のこう言う反応になるのでしょうか？

それは、女の子孫というものの『希望』の一点。それが、全てを変えてくれる。そのために我々は、これからすべきことがあるわけです。これから産まれるもの達の全てを我々は守り育てること。慈しんで行くこと。その全てをね、成すのは誰か？「エバだ」と。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

これ、本当は、エバと書いてあるけど、「ハバー」なんです。ハア、バーと言って喉の奥の音ができるんです。ハア、ハアバー、これをラテン語やギリシャ語にハアーという音ができないもんだから、『イヴ』とか『エバ』とかというようにアルファベットを変えちゃったんです。だからいつの間にか現代では、アダムとエバになっています。それは、『生きている』という言葉表現しています。ハアバー、『生きているもの』という、そういう表現です。そのものを生み出すからだ。私たちは。 1:09:19.80

この中でどうですか？ 三者に対する言葉が、罰と呪いだけだったら、悲惨ですよ。なんの希望もない。でもアダムは、自分が苦勞して働かなければならないということはわかるけど、私のゆえに土地を呪われてしまったんだったら、私のこれからの生き方によって、祝福される、そういう希望もここで現れてくるわけです。

それで、誰と向き合うべきなのか、というものが、ヒシヒシと現れてくるのです。それが16節、女に言われた最後の平行法、[あなたは夫の存在を求めてやまない。彼はあなたを治めることになる]そして二人は向き合って、また出発してゆくことになる。いったんこれでダメージを受けたけれども、女が生み出す『いのち』を、二人で産み出して、守っていくんだという。 1:11:07.43

そこで、21節、[神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せて下さった]・・・『裸であるということをアダムが知ったことを、神様は飲み込んで、それを覆って下さった』ということですよ。アダムは、妻を覆って生きることを、所謂、その心と決心が表れながら、神様は神様で、アダムとその妻を覆って下さったのだよと。『皮の衣』という限りには、動物を殺して血を流して、・・・というその『衣』でしょ。ここにも神の心が表れているという。決心が問われているということです。 1:12:20

22節[神である主は、仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように]しようと。これは、当然なことになります。なぜならば、蛇、サタンといわれるものと、所謂、仲間のようになってしまったものをいのちの木を、同じようにこれからも食べ続けるならば、『神のいのちを蛇に分け与えることになります』から、神様は、それは出来ない。

23節[そこで、神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった] 24節[こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた]と書いてある。ここで、23節と24節に書いてあることは、重要なんです。ただ、その後処理を書いてあるだけのようですが、人をエデンの園から『追い出された』という言葉と24節のこうして神は人を『追放した』という言葉は、同じ追い出した、なのに、なんで言葉を変えて、二回も書くのでしょうか。・・・23節の『追い出す』というのは、24節の『追放』とは、原文が違います。

23節の『追い出す』というのは、追い出すと言うことも言えるけれども、ニュアンス的には、『送り出す』『遣わす』そうとも訳せる言葉。ここで、『追い出す』と訳しているのは、訳す人達の個々の読みの解釈から、この言葉をとっているんです。だけれども、厳密に言うと、『追い出す』と言う厳しい言葉を使うまでもなく、『送り出す』何かをさせるために『送り出す』『遣わす』とも、十分言えるんです。

5C3 回目キングダムセミナー20250308

だから「取り出された土を耕すようになった」という、『耕す』『守る』ということは、アダムにさせたい事だったけれど、神様はエデンの園の外でもそのことを続けさせたと、いうことなんです。その使命は、継続しているんですよ。だから、『派遣』したんですよ。その為に送り出したんですよ。」と言いたい。

23 節と、サタンにいのちを与える訳にはいかないから、24 節、「こうして神は人を、（ここでは）『追放』して、いのちへの木への道を守る為にエデンの園の東にケルビムの輪を描いた。回る炎の剣を置かれた。』ここで、光と闇の世界を切って、きっちり分け続けているんです。」ですね。

このことの転末を我々のうちに、主は語りかけられました。このことの中でね、我々の内なるエデンの園は、どう騒いでいますか？あなたの内側で。あなたはどんなエバですか？あなたは今どんな気持ちのアダムですか？そして、神様の思いは、なんですか？よく、思い巡らしていきましょう。

はい、つらつらと聞いただけでは、心をノックしただけですよ。これを元にじっくり自分で時間をかけて、御言葉と向き合って、対面して行くことなんです。思い巡らしてください。

はい、できれば何度も聞いて、考えて、一月を送ってください。その中で芽生えたあなたの内なるアダムとエバの声をまた、1ヶ月の間に個人的に聞かせて下さい。

本当にみなさんの内なるアダムとエバ、内なる主の聖なる思いを解き放ち、祝福します。アーメン。我々はそれを食べます。我々はそれを毎日の食事以上に美味しいものとして、舌で味わい飲み込み、噛み砕いて、自分たちのものとしたいと思います。アーメン！

じゃあ、今月のキングダムセミナーをこれで終わりますけど、一ヶ月キングダム・セミナーは続いていると思って下さい。あなたの内側で。いいですか？ハレルヤ！アーメン！

有難うございます。また、来月。

何かコメントがありましたら、自在に個人的に寄せて下さい。感謝します。